

「デイほすぴす（療養通所介護）」が重症児の発達促進への効果を報告

デイほすぴす 市橋正子

### 【研究の背景と目的】

重症児が在宅療養を継続するために必要な社会資源が不足している。

さらに、家族のレスパイト目的の小児対象施設でなく、児本人の発達促進を目的とした在宅看護の研究は見当たらなかった。

訪問看護が多機能化し、通所機能と泊まり機能を持つ「療養通所介護」は、重症児の発達を促進する効果を明らかにする。

### 【研究の計画・方法】

調査期間：2011年8月～2012年7月

対象：重症児・重症児の家族

方法：療養通所介護で週1回～3回、泊まりを1泊2日必要回数行い、個別看護を提供。

児の発達と父母、兄弟児の変化を観察評価する。

毎月デイカンファレンスを行い、ケア内容の計画を立案・評価を行う。

父母と面談・インタビューを行う。

### 【期待される成果・波及効果】

通所と泊まりによる個別看護により、社会刺激が加わり、児の成長発達の促進が期待される。

兄弟児が両親のケアを十分に受けることができ、兄弟児の心の成長が促進される。

両親が兄弟児のケアを行うことで育児ストレスの軽減が期待される。

### ●対象児：D君 16歳 senior loken 症候群 末期腎不全 腹膜炎

現疾患の合併症で失明しており、知的レベル低く、発語はない。生後からの長期療養治療を受けてきた。合併症の腎不全に対して延命治療として県外大学病院へ移植を検討するため、母親の意思で転院してきた。父親と別居となり、母親がひとりで介護している。母親が医療者に無理な要求をすることが多く、訪問看護ステーションを交代となったが、当ステーションスタッフも、ストレスを溜めている。母親の疲弊を推察し、デイほすぴすで、レスパイトケアを行うことにした。

《訪問看護の申し込み理由(大学病院外来から依頼)》

入浴の介助

透析の管理

＜看護上の問題＞

#成長発達の障害

\*16歳の現在まで母親と密着に関連

\*16歳の現在までほとんど病院生活

#母親の役割緊張

\*よりよい治療を求めて神戸に転居。父親と別居となり介護者は母親ひとりである。

《経過》

上記目的で訪問看護を行っていた。看護問題は訪問看護の時間内で介入することが困難であるため、デイほすびすでの介入を計画していた。母親は看護問題を、自分の問題と捉えておらず、介護上のストレスを抱えているが、デイほすびすの利用への決断はできなかった。

母親が突発事故で捻挫をしたため、やむを得ず、デイほすびすを利用することになった。

その後、面談を行った。

《デイほすびすで通所看護を実施》

(9月7日)

- ・音楽でリズムをとる
- ・OTによるタッチング
- ・NSによるアロママッサージ
- ・PTによる介助自動運動
- ・車椅子で散歩 (ALS患者のベットへ挨拶に行く)

《母親と面談》

(9月7日 9月14日)

- ・重症児を育ててきた苦労をわかってくれる人が誰もいない。
- ・腎不全のため腎移植が有効とされているが母親は決断できない。
- ・よりよい治療法を求めて、母親はD君を連れて神戸で住むことにした。その大変さをわかってくれる人がいない。

《結果》

- ・ケアの方向が一致しないまま、訪問看護のキャンセルが続いた。
- ・母親は腎移植をしないことを決断した。
- ・延命治療をせず、残された時間は父親がいる家庭へ戻ることを決意したため転居となった。
- ・デイほすびすの利用は1回のみとなり明らかな結果はでなかった。

●対象児:Kちゃん 6歳 全前脳胞症 脳性麻痺 てんかん  
発作時 HOT 使用 PEG より注入栄養

《訪問看護の申し込み理由(こども病院外来より)》

母親が兄弟児との時間を持つため、児を預けたい。

<看護上の問題>

#非効果的気道浄化

\*気道粘膜繊毛系の未発達による痰の貯留や咳嗽反射が弱いことに伴う喀痰不十分

#家族の役割緊張状態

\*兄弟児(兄)の世話が不足する

《経過》

こども病院から上記理由で訪問看護とデイほすびすの依頼があった。状態観察で訪問看護を開始した。自力での排痰が難しく、頻回の吸引や拭きとる世話のため、つきっきりの介護が必要であることがわかった。そのため、介護者なしで受け入れる施設はなく、養護学校も常に母親が付き添わなければならない。

《デイほすびすで通所看護実施》

(8月24日・9月8日・9月22日・10月6日・10月20日・11月10日・11月24日・12月1日・12月15日・1月5日・1月19日・2月2日・2月16日・3月1日・3月15日・4月5日・4月19日・

5月10日・5月24日・6月7日・6月21日・7月5日・7月19日)

・疲労しない時間内(1時間)で車椅子で過ごす。ベッドで1時間休憩

・複数の看護師が排痰ケアを行いながら声をかける。

《母親との面談》

(9月22日・10月20日・11月24日・12月15日・1月19日・2月16日・3月15日・4月19日・5月24日・6月21日・7月19日)

Kちゃんを預けることができなことは入院以外ではじめて。この時間は、小学3年生の兄と関わる貴重な時間であった。これまで、ずっと兄はわがままをいったことがなく、ひとりで我慢することも多かったと思う。兄は多感な年齢になるので、この時間は家族全体にとって大切だと思う。

《結果》

表情硬いまま過ごしていたが、デイほすびす3回目利用で表情は和らぎ、笑顔がみられるようになった。

母親との面談から兄弟児と母親自身のストレスが緩和されて、兄弟児によい影響があると思われる。

●対象児:Nちゃん 12歳 福山型筋ジストロフィー

PEGより注入栄養。易骨折。

《デイほすびす申し込み理由(こども病院外来)》

社会性の向上を目的に預かってくれる施設がないため、デイほすびすで預かってほしい

<看護上の問題>

#身体損傷のリスク:易骨折

\*筋力低下

#社会性の低下

《経過》

生活保護・母子家庭で、母親が唯一の介護者である。1歳の兄弟児がおり、母親の育児疲労が予測される。経管栄養で、今後PEG造設を予定している。軽度の発達遅延があり、つきっきりの世話を要求する。

《デイほすびすでの実施状況》

養護学校の夏休み中の利用に限定される。2回目の利用で表情が和らぎ、車椅子で移動することを要求するようになった。

看護師のカンファレンスや勉強している場に参加するようになった。

(8月10日・8月17日・8月24日・8月31日)

《面談》

(8月24日・9月7日)

《結果》

看護師や理学療法士などが働く場を体験見学することや、複数の人から受ける刺激がより多く受ける場になっている。

夏休みだけの4回の利用になったので、成長発達に及ぼす影響は表れなかった。

●対象児:Mさん 16歳 脳性まひ 気管支ぜんそく  
人工呼吸器

《デイほすびす申し込み理由(あんしんすこやかセンターから紹介)》

介護者は母親ひとりである。祖母が高齢で入退院を繰り返し、介護が必要な状況になってきた。Mさんも、気管支ぜんそくの入退院を繰り返し、母親の介護量が増大している。養護学級が夏休みの期間、Mさんを安全に預かってくれるところを捜している。

<看護上の問題>

#非効果的気道浄化

#身体損傷のリスク:易骨折

\*筋力低下

#社会性の低下

《経過》

母親がひとりでMさんが16歳の今日まで介護してきた。祖母が介護が必要になり、Mさんの療養する場を開発する必要性を感じていた。Mさんの介護方法は母親が独自に培ってきた方法があった。安心して預かるために、訪問看護で介護方法を共有した。デイほすびすの場では、看護師が意図的に四六時中、声をかけたり、体に触れたりして社会刺激を与えた。

《デイほすびすでの実施状況》

(7月5日、7月12日、7月19日、7月26日)

《面談》

(6月28日、7月28日)

## 《結果》

4回実施し、3回目、4回目は環境に慣れてリラックスした表情で、感情を表現するようになった。

## 【考察】

重症児の兄弟への影響は明らかにすることはできなかった。面談によってわかったことは、母親の不安に介入することはできたといえる。重症児と密着して過ごす時間が多くなる夏休みは、負担感も不安感も増大している。レスパイト目的のデイが有用であることはこれまでも明らかにされている。軽度の発達障害児では夏休みの4回程度の利用で心身発達の変化はみられなかった。重症では、発達促進のため、看護が意図的に介入することで、表情や感情に変化がみられた。訪問の1時間ではみられない反応が、長時間の看護師の関わりによって引き出されることがわかった。

## 【結語】

看護師が意図的に長時間看護介入することで、重症児の発達促進が期待できる。

## 【感想】

重症心身障害児が教育を受ける場はあるものの。介護や看護を受ける場が少ないと思います。その中で現実には介護と看護が混同されて提供されてると思います。児の発達促進に介入していく看護として、1年間実践しました。結果は明らかな効果の評価できませんでした。感想としては、手ごたえを感じることができました。制度としては未整備な分野であるので運営面の課題は残りますが、継続できるようにしたいと思います。

「公益財団法人 在宅医療助成勇美記念財団の助成」により本研究を行いました。